

まえがき

本書は、日本貿易振興機構アジア経済研究所で2年間実施された「市場経済転換期の中国の政治過程」研究会の成果である。

中国政治研究では中国共産党による一党支配体制のもとでの政治システムを解明することが課題のひとつであり、これまでも先人たちによってさまざまな角度から多くの研究成果がもたらされた。1980年代に改革開放の名のもとで進められた経済システムの転換は中国にめざましい経済発展をもたらしたことは周知の事実である。他方、政治に目を向ければ、中国共産党による一党支配体制という政治の大きな枠組に現在も変わりはない。

改革開放、さらに市場経済化が進むなか、議会にあたる人民代表大会の監督機能の強化や農村基層での直接選挙の実施など個々の政治改革が実施され、研究対象として高い関心が示されている。他方、中国の政治的な変化として、おおざっぱに言えば中国共産党を頂点とした、上からの命令、下の服従といった一元的な政治過程だったものが変化して、政治過程が多元化した、複雑化したといったことがよく指摘される。しかしそのことを感覚的に語ることは簡単なのだが、どのように多元化したのか、それ以前に本当に多元化しているのかということ常々疑問に思ってきた。そして、その疑問を解消するためには政治、経済、外交などのいくつかの領域で具体的な事例を分析してみる必要があるのではないかと考え、それを具体化するために本研究会はスタートした。

政治過程の多元化を明らかにしたいという研究上の「野心」を実現するための環境は過去に比べれば整ってきている。ひとつはインターネットの普及により、さまざまな事象が取り上げられ、その経緯や関係者の発言、暴露話などが細かく報道されるようになり、研究に必要な情報量が格段に増えたこ

とである。もうひとつはヒヤリング調査が可能になり、時間と人間関係があれば、当事者やその周辺の人たちから直接情報を得ることができるようになったことである。こうした環境の変化が「野心」をかき立てるきっかけとなった。

しかし、ブラックボックスであるという理由からこれまでその目的を達成することが難しかった中国の政治過程分析は、単に情報量が増えたことだけで簡単になるわけではない。この目的の達成には緻密な分析枠組を準備したうえで臨む必要がある。そのために、本研究会は政治過程の多元化の一側面として、アクターに焦点をあて、その多様化の状況を明らかにすることで、「野心」を実現する第一歩にしようと考えた。そのため、各論文ではたびたびアクターという言葉が登場することになる。また本研究会では1年目終了時に各執筆者が取り組む事例研究のための資料として、1990年以降に発表されたものを中心に既存研究を紹介し、これまでの研究成果や今後の研究課題をまとめ、さらに関連するアクターの抽出を行い、その特徴をまとめ、「市場経済転換期の中国の政治過程研究会中間報告書」(調査研究報告書)として印刷した。

こうして本研究会の成果を世に問うことになったわけだが、変容する中国政治を理解するうえでの貢献ができれば幸せである。しかし所期の目的が達成されたかどうかは読者の判断を仰ぐしかない。各方面からのご意見、ご批判をいただければ幸いである。

さて、この2年間本研究会は、以下の機関、個人の方々に大変お世話になった。感謝の気持ちを込めて、ここに紹介しておきたい。まず、全執筆者は平成15年度外務省日中知的交流支援事業に参加し、中国を訪問し、当事業の中国側パートナーである復旦大学国際関係与公共事務学院の研究者と交流し、また各地で現地調査を行う機会を得た。ここに外務省、特に当事業を主管するアジア大洋州局中国課に厚くお礼申し上げる。また復旦大学国際関係与公共事務学院にも心よりお礼申し上げる。

次に、研究会に外部講師としてお越しいただき、示唆に富むお話をして

いただいた岩崎育夫（拓殖大学教授），岩崎正洋（杏林大学助教授），上野俊彦（上智大学教授），王長江（中央党校教授），小島華津子（筑波大学講師），郭定平（復旦大学教授），趙宏偉（法政大学教授），林尚立（復旦大学教授），大塚健司（当研究所研究員），船津鶴代（同）の各氏に心よりお礼申し上げます。またオブザーバーとして研究会に参加し，議論をより活発なものにさせていただいた竹内孝之（同）と山口真美（同）の両氏にも感謝したい。

さらに全ての初稿に丁寧に通し，コメントをしていただいたアジ研内部，そして外部の査読者の方々に心よりお礼申し上げます。

2005年9月

編 者